

日本建築学会近畿支部住宅部会セミナー 報告書

『ともにつくる』ことがひらく住まいの可能性

講師：河野 直 氏（つみき設計施工社）

コメンテーター：萩野 紀一郎 氏（富山大学）

司会進行：柳沢 究（京都大学）

文：辻京佑(京都大学 柳沢研究室)

2022年3月8日(火)、日本建築学会近畿支部住宅部会と京都大学柳沢研究室主催でセミナーが開催されました。つみき設計施工社から河野氏を、富山大学から萩野氏をお招きし、ご登壇して頂きました。



河野氏は「参加型リノベーション」として、施主のみならず近隣住民や外部の希望者などとともにワークショップ形式で建築の設計と施工を手がけてきました。建築は主に①住み手(施主)・②描き手(設計者)・③造り手(施工者)の三要素から成ります。参加型リノベーションでは、これらが相互に関わり合う(=ともにつくる)ことによって、新しい価値を生み出されます。住み手は自ら作った建築に、より一層愛着を持つようになるでしょう。また、作業をするために集まった不特定多数によって、新しいコミュニティが生まれます。そして、本来なら触れるはずのなかった様々な技術・知識を、ワークショップ形式で楽しみながら学ぶことができます。

つみき設計施工社では現在、千葉縣市川市を拠点に活動しています。昔は都内全域を対象としてい

たのを、取えて狭めたそうです。エリアを限定してワークショップを手掛け続けた結果、住む街に仲間が増え、居場所が増えました。また、遠出をしない分、通勤時間が減り、その時間を他に充てられるようになりました。

特に、"123ビルディング"の例では、廃墟同然だったビルで「ビールを飲む会」を開催したという話が印象的でした。結果的にその段階で複数組の入居を勝ち取れたようで、コミュニティの重要性を再確認しました。



その後、事例を交えて、具体的にはどのようにワークショップを行なっているのかを教えていただきました。施主担当箇所とプロ担当箇所を隣接させ、プロの仕事を見て学ぶことができるようにしたり、ワークショップ担当箇所を施主担当箇所と隣接させてワークショップ参加者が本来なら行わない過程を、施主を通じて見ることが出来たり。ここにも、施工に携わる様々なポジションの人間が有機的に関係づけられていく様子が見て取れました。

河野さんの講演終了後、萩野さんのコメント、参加者からの質疑応答が行われました。最後に、対面での参加者で写真撮影を行い、セミナーのプログラムは終了しました。



全体を通して非常に学びの多い時間でした。私も大学課題で建築とコミュニティのあり方を考える場面はありましたが、今回の講演会ではワークショップという手法やその結果が多数の実例と共に紹介されており、二者の関係性の解像度がぐっと深まったように思えます。

河野さんも仰っていましたが、ワークショップとは、言わば現代の相互扶助の一形式です。今回の講演会を聞いて私が連想したのは二つ、「白川郷・合掌造りの屋根の葺き替え」と「祇園祭の山鉾」でした。ワークショップと今挙げた二つは、参加者が金銭的な対価を求めているという点で共通しています。しかし、その背後にあるコミュニティの距離感は三者三様です。

まず、白川郷のケースでは、ある建物の屋根が傷んだ場合、住民全員が協力して葺き替えを行います。それは無償の分担作業ですが、そのかわり他の屋根が傷めば自分も葺き替えに行きます。これは相互扶助ですが、その背後にはある種の義務感が存在しているようにも思えます。つまり、「この『掟』を無視する者、郷にいるべからず」というプレッシャーによるものです。それが郷のルールなのです。

次に、祇園祭のケースです。これは私が京都在住なので連想したのですが、祇園祭の山鉾はかなり

大掛かりな組み立てが必要で、20mを超えるものもあります。こちらも各自治体に所属する方々が協力して、僅か2~3日の間に全工程を終えます。これも金銭の発生しない労働ではあるのですが、その原動力は存在しないのではないかと考えています。強いて言えば、組み立ての技術を後世に伝えるという責任感はあるのかもしれませんが、これは現代日本に残るほぼ唯一の完璧な相互扶助なのではないでしょうか。

最後に、ワークショップについてです。言うまでもなく参加者に金銭は支払われません。それでは参加者は何を目的に参加しているのか。十人十色だと思いますが、おそらく「普段出来ない作業をやってみたい」とか「ワークショップを通じて新しいコミュニティに属したい」とかが挙がるのではないのでしょうか。ここで興味深いのは、人によって設定している「対価」が異なることです。白川郷のケースと比較するとポジティブなモチベーションからワークショップに参加していることが予想される一方で、それ自身に祭りの要素も内包している。現代の希薄な人間関係だからこそ成し得る、新しい相互扶助の形なのではないかと感じました。そういう意味でも、河野さんの試みは大きな価値があると言って間違いないでしょう。という一学生の感想でした。